

論文

チベット仏教寺院における仮面芸能（チャム）の比較研究

——内モンゴル「大召寺」を中心に——

根敦阿斯尔

GENDUNASIER

はじめに

チャム（ཁམས་པ་）は、チベット仏教の密教に特徴的な息災・調伏の儀式的呪法で、諸悪魔を調伏する法要である。本研究は、2012年度神奈川大学非文字資料研究センターより「内モンゴルにおける大召寺のチャムに関する研究」という研究課題で奨学金を受け、チャムのフィールド調査を行った成果である。

本稿では、主に中国内モンゴル自治区のチベット仏教の年中行事であるチャムが、現代社会においてどのような役割を果たしてきたかを明らかにすることを目的としている。現代社会におけるチベット仏教の変遷をたどっていくことは、これからのチベット仏教が現代社会の流れの中でどのように発展していくべきなのかという視点へつなげると考えられる。

従来、チベット仏教の研究は、歴史学は史料を中心に、民俗学や文化人類学は現地調査を中心に行われてきた。だが、チベット仏教は密教であるためラマ僧は秘密主義的な面を持つ。そのため、年中行事の内容については詳細な資料を得ることは困難であった。その上、チベット仏教における特殊な専門用語の存在も、調査の展開を困難なものとしてきた。そのため、寺院の年中行事に関する研究も少ない。現在チャムについての先行研究としては、木村理子のインドのラダック地方のチベット仏教の寺院における研究がある。木村氏はチャムの復興の意義に注目し、寺院の特色について分析しようとしている。それは、寺院のチャムの復興の意義についての個別実証的な事例を、他のチベット寺院と比較することでその特色を見出そうとする研究手法である [木村 2011]。この、木村理子の研究はインドのラダック地方だけではなく、中国内モンゴル自治区やモンゴル国におけるチベット仏教のチャムを調査対象としていた。しかしその内容は、各寺院の殿堂内で秘密裏に執り行われるチャムの内容ではなく、殿堂外で行われるチャムの一部分を記録していたものである [木村 2007]。

実際、チャムの種類とその形態については、チベット仏教の宗派や地域により大部分が異なる。その原因は、1990年以降になると内モンゴルのチベット仏教の復興、寺院の再建が急速に進んだことに伴って、失われたチャムの伝統の復活を目指す動きが見られ始めたことにある。しかしながら、以前の形態のチャムを明確な形で復元するのは極めて難しかった。本来、師匠からの口承を重視するチベット仏教の密教において、儀軌経典を誦する仕方やチャムは寺院ごとの師匠の口承によって継承されてきたからである。そのため、その口承が長期にわたって閉ざされていたことは、チャムにおいて大きく影響した。さらに、復元されなかった要因の一つとして考えられるのは、密教であるチベット

仏教の寺院においては、チャムなどの行為の伝承がそれぞれの専門の師匠により昔の一子相伝的に継承される仕方があったためでもある。そのため、一人の師匠が欠けることでさえも、一つのチャムの演目の運営に即時に影響を及ぼした可能性がある。

ある高僧は政治運動の期間中に思想改造を受けたり、あるいはその最中に死亡したりしている。また、思想改造を受けたラマ僧たちは、その後、俗人になって一般企業に就職することもあった。さらに、寺院の各種の儀軌経典を焼却したため、寺院も継承者も少なくなった中で10年ぶりに寺院でチャムを行おうとしても、半分以上実施することはできなかった。1980年以前では、「迷信」行為としてチャムの宗教性について語ることにすら禁じられていた。そして、もともと密教のチャムとして秘儀があるため、その全容を留めた記録も残っていないのである。そうしたことから、大召寺における最初に復元されたチャムは、大召寺のゾインザスック・ダーラマ僧⁽²⁾（寺の住職）やシルグト・ラマ僧⁽³⁾（寺における首席の僧）、また、その他の年輩ラマ僧、及び、大召寺に隣接するシレート・ジョー（席力図召）の年輩ラマ僧も集まって、昔の踊りの形態を思い出しながら行われた。そのため、2000年以前に、大召寺で行われていたチャムの形態は、現在のシレート・ジョー（席力図召）のチャムとほぼ同様である。その後、2000年に、ウシン・ジョー（烏审（審）召）からラマ僧を招聘して教わったチャムと当時の大召寺の形態を合わせたものが、現在の大召寺のチャムとなっている。

大召寺のチャムの復興の意義、目的、その変化、及び社会における役割について、筆者自身がかつて僧侶という立場にあった大召寺のチャムの特色を、他の地域のチャムとの比較によって、可能な限り明らかにしたい。そこから、チベット仏教は現代における伝統文化の消失と現代への適応の一場面について明らかにする。

1 調査地の寺院概況

(1) 調査地内モンゴル自治区フフホト市におけるチベット仏教寺院と大召寺について

モンゴル族はシャーマニズムを信奉していたが、13世紀中頃にはモンゴル族の上層部ではチベット仏教のサキャ派（花教）とニンマ派（紅教）が信仰されるようになった。1570年以降、アルタン・ハン（阿勒坦汗）がチベット仏教のゲルク派（黄教）を取り入れると、内モンゴルトメットの地域からモンゴル全地域にあまねく伝わった。明朝末期から清朝末期にかけて、チベット仏教のゲルク派はモンゴルの地域においてかなりの発達がみられた〔喬吉 2008：42〕。

内モンゴル自治区フフホト市には明朝末期から解放以前まで、「召城（お寺の町）」とも呼ばれるほどチベット仏教寺院がたくさんあった。「大召」（寺）は7ヶ所あり、「小召」（寺）は8ヶ所あり、「綿綿召」（小さな寺）は72ヶ所もあった。従って、フフホト市は「召城」だと誉め讃えられた。民間では「七大召（寺）、八小召（寺）、七十二個綿綿召（小さな寺）」といわれた〔德勒格 1998：523〕。以下の表（表1～表3）は解放以前の内モンゴル自治区フフホト市の寺院をまとめたものである。

表1 七大召

七大召	モンゴル語名	漢名	建築年代	寺の所在地
1	イック・ジョー	無量寺（大召）	1579年	玉泉区大召前街北側
2	シレート・ジョー	延寿寺、席力图召	1585年	玉泉区石头港北側
3	バック・ジョー	崇福寺	1623年	玉泉区小召街北側
4	ブンスック・ジョー	崇寿寺	1661年	玉泉区西茶坊第七中学内
5	ネムチョ・ジョー	隆寿寺	1669年	玉泉区西尚義街
6	ラブチョ・ジョー	宏慶寺	1667年	玉泉区南柴火市街北側
7	バンティタ・ジョー	尊勝寺	1662年	毫沁营郷哈拉沁沟内

表2 八小召

八小召	モンゴル語名	漢名	建築年代	寺の所在地
1	ブンスック・ジョー	広化寺	1658年	土默特左旗毕克旗鎮北青山郷
2	シボチ・ジョー	慈寿寺	1696年	土默特左旗兵州兵州亥郷什报村
3	トゥラマトン・ジョー	崇禧寺	1655年	罗家营郷北山中
4	チャンジャ・ジョー	広福寺	1765年	玉泉区小召前街西側
5	ダイビン・ジョー	寧祺寺	1722年	回民区太平街北端
6	チョーチ・ジョー	延祺寺	1653年	玉泉区五十家街路北
7	メトル・ジョー	灵覺寺	1575年	土默特右旗美岱召郷美岱召村
8	ウスット・ジョー	慶縁寺	1606年	攸攸郷東素図村

表3 七十二個綿綿召

漢名	建築年代	漢名	建築年代	漢名	建築年代
華严寺	1576年	古佛寺	1398年	圪什貴召	1648年
慶縁寺	1606年	兴福寺	1650年	大洼村廟	1651年
広化寺	1658年	灵照寺	1657年	大召東倉廟	1697年
広集寺	1667年	永寿寺	1670年	察哈尔寺	1583年
霍寨召	1651年	西家廟	1668年	東喇嘛洞召	1655年
臧康廟	1587年	公和寺	1666年	小潮岱廟	1690年
南家廟	1691年	北家廟	1669年	吉特庫召	1679年
三官廟	1661年	東家廟	1662年	討和齊召	1685年
広安寺	1658年	長寿寺	1697年	珠尔沟召	1658年
同经寺	1682年	増福寺	1696年	烏素図東召	1700年
隆福寺	1695年	全化寺	1699年	席力图東廟	1722年
哈达召	1703年	永福寺	1719年	二十家村廟	1718年
広层寺	1671年	羅漢寺	1725年	法成广寿寺	1769年
観音寺	1722年	召河召	1759年	毕克氣召	1663年
福廟	1723年	五塔寺	1727年	黒格尔召	1739年
新城廟	1735年	法禧寺	1725年	察哈勒召	1785年
福慧寺	1738年	仁偌寺	1732年	卡特利召	1755年
慶元寺	1735年	五当召	1738年	西讨速号庙	1754年
広法寺	1720年	菩提寺	1755年	登奴素召	1732年
彰慶寺	1706年	普祜寺	1765年	塔尔梁召	1769年
広福寺	1764年	倫慶召	1759年	苏卜盖召	1758年
药王寺	1768年	白庙	1785年	小召村召	1798年
荟安寺	1773年	全慶寺	1795年	広寧寺	1793年
白塔寺	1820年	南山寺	1785年	紅召	169?年

前述のフフホト市内の寺院は文化大革命の時期にすべて破壊された。破壊の程度がそれほど深刻でなかったのが、7ヶ所の大召のうち大召寺と呼ばれる寺院であった。次に深刻でなかった寺院は、シレート・ジョー（席力図召）で、3番目はトーウンソップガ・ジョー（五塔寺）であった。他の寺院については破壊の程度がきわめて深刻で寺院の建物は半分も残らなかったが、現在では新寺院として復元されつつある。表4は現在のフフホト市における寺院の現状である。

表4 現在のフフホト市における寺院の現状

モンゴル語名	明朝期の寺名	清朝期の寺名	ラマ僧の人数			建築年代
	漢名	漢名	建国前	建国後	現在	
イック・ジョー	弘慈寺（大召）	無量寺	187	65	62	1579年
シレート・ジョー	席力図召	延寿寺	333	90	35	1585年
トーウンソップガ・ジョー		五塔寺、慈灯寺	20	5	0	1727年
ウスット・ジョー		慶縁寺	200	61	10	1606年
ブンソック・ジョー		広化寺（喇嘛洞召）	80	37	10	1658年

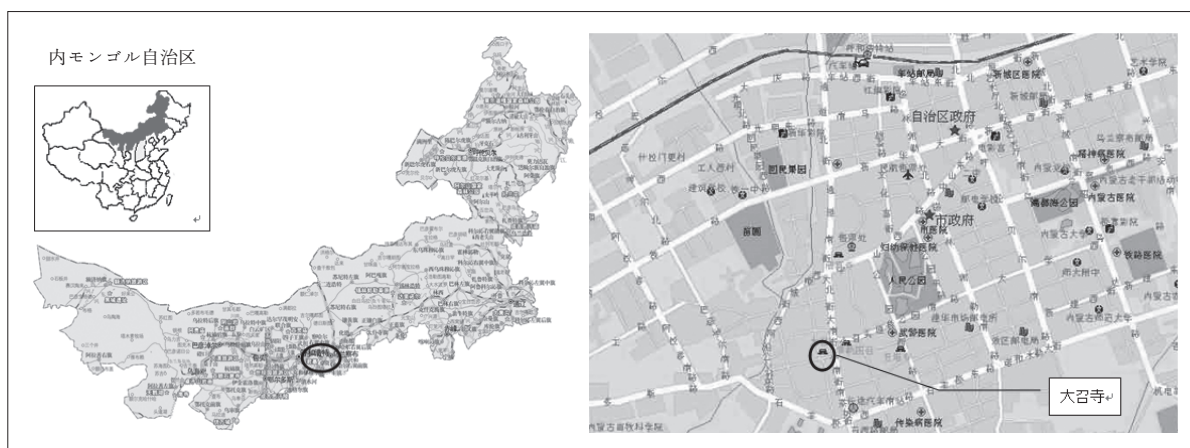
1578（明朝万暦6）年、内モンゴル自治区のトメット（土默特）部落の首領であるアルタン・ハンが青海でソナム・ギャツォ（ダライ・ラマ三世）に接見して、「ダライ・ラマ」の称号を授けた。ダライとはモンゴル語で海を意味し、ラマはチベット語で学者を意味する言葉である。つまり、ダライ・ラマとは、学識が海のように深くて広いという意味である。アルタン・ハンは、自分がモンゴルトメット部落へ帰った後チベット仏教寺院を建て、そこに真珠や宝石、金銀を使った釈迦牟尼の像を建造することをダライ・ラマに約束した〔徳勒格1998：97-107〕。

アルタン・ハンが1579年に完成させた寺院が、現在のフフホト市にある大召寺である。この大召寺が、現在の中国内モンゴル自治区フフホト市にあるもので、431年の歴史をもつチベット仏教寺院である。地図1では内モンゴル自治区フフホト市と大召寺の位置を表示する。

大召寺は清時代の有名な「七大召」の一つであり、最も大きくかつ著名な寺院である。大召寺は仏教聖地というだけでなく、現在では国内外に知られる有名な観光地でもある。寺院建築、真に迫る彫塑、精巧で美しい壁画、浩瀚広大な経巻、神秘的なチベット語で「チャム」と呼ばれる仮面の踊り儀礼、広大なモンゴル語でマニウリルと呼ばれるマニ法会（漢語で鍊丹会という）、仏教音楽などが独特な寺院文化を構成している。

そのため現在、フフホト市の大召寺は「国家級文物保護単位」と呼ばれる寺院、また、内モンゴル自治区の「3A級景区」と呼ばれる観光地になっている。さらに現在も同市のチベット仏教文化の中心となっている。しかし、本論で大召寺を調査地に設定した理由はそれだけではない。筆者は1993年に大召寺のシルグト・ラマ僧の推薦で大召寺に入ることになった。11年間ラマ僧たちと共に生活し、チベット語の経書を学び、寺院関係の年中行事に参加してきた。大召寺を調査地に設定したのは、このような理由もある。

地図及び図は大召寺の現状である（地図1、図1）。



地図1 内モンゴル自治区フフホト市と大昭寺の位置

この地図は、<http://www.chinaviki.com/china-maps/inner-mongolia/hhht.html> と <http://www.arachina.com/map/neimenggu/>（いずれも2010年12月12日）を基に作成した。

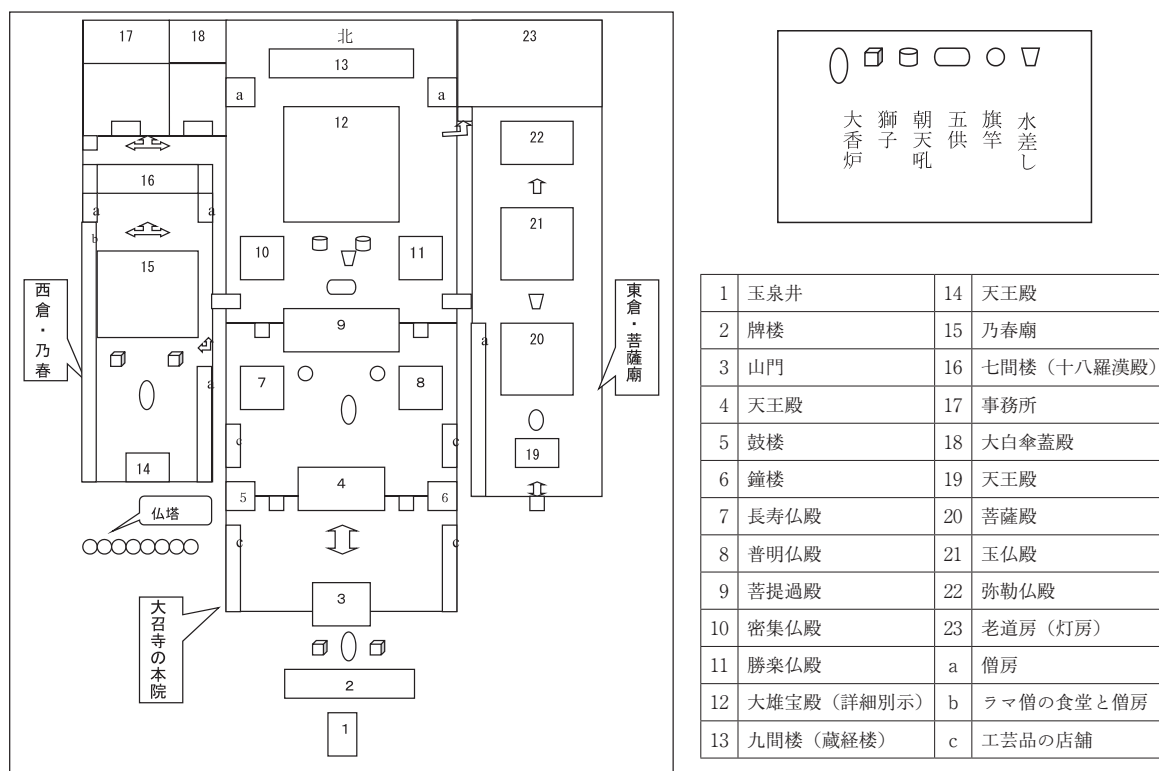


図1 大昭寺の建築物の配置図である

(2) 現在の大昭寺の年中行事の概要

まず、現在の大昭寺の年中行事を列記する（表5-1、表5-2）。なお、ここに列記した年中行事はすべて旧暦で行われている。

その他、時期が一定していない行事もある。葬式や、平安経や祈福経など信者の依頼により行われる法事である。また、実際にチベット仏教の寺院において行われる年中行事は、同じ宗派でも地域により多少の違いがある。さらに、寺院の年中行事に差異を生むものとして、寺院における活仏の有無

表 5-1 現在の大召寺の年中行事

(旧暦) 行事の日程	行事の内容
1 月 8 日～ 1 月 15 日	祈願大法会 午前と午後、経を誦する。
1 月 14 日	午前中、バリンを送る活動。
1 月 15 日	午前中、晾仏と跳鬼が寺廟の周囲を回る。
4 月 8 日～ 4 月 15 日	釈迦牟尼の誕生を記念する。 午前と午後、経を誦する。
5 月 13 日	午前中、オボ祭り。
6 月 8 日～ 6 月 15 日	午前と午後、ガンジョル（大蔵経）を誦する。
6 月 14 日	午後、バリンを送る活動。
6 月 15 日	午前中、晾仏と跳鬼が寺廟の周囲を回る。
8 月 14 日～ 8 月 21 日	マニ法会。7 日間、昼夜休みなく経を誦する。
10 月 23 日～10 月 25 日	宗喀巴大師の成道を記念する。午前と午後、経を誦する。
12 月 23 日	竈の祭り。
12 月 25 日	仏灯を灯す活動。
12 月 30 日	夜間に祈福経を誦する。福の神を迎える。

表 5-2 毎月の行事

2 日	午前中、経を誦する。
8 日	午前中、経を誦する。
15 日	午前中、経を誦する。
25 日	午前中、経を誦する。

がある。昔から活仏の有無は、その寺院の年中行事において、同じ行事であっても日取りが異なり、読経のリズム、踊りの形なども異なる。このように、寺院の年中行事の全体を捉えることは難しいため、本稿ではすべての年中行事についてではなく、チャムについて記述する〔根敦阿斯尔 2011：153-154〕。

2 チャムの由来

(1) チャムの語義と起源

チャム (འཇམ) という語はチベット語であり、モンゴル語ではチベット語をそのまま用いてチャムといっている。内モンゴル自治区におけるチャムに関する呼称については地域により一般的に「跳鬼(漢語)」「チョウブザ (チョウブザ：漢語とモンゴル語の合成語である)」「チョウチャム (チョウチャム：漢語とチベット語の合成語である)」等である。チャムは『蔵漢大辞書』(2008)によると、単なる「舞」の意味であるが、寺院で行われる舞であるため宗教舞踊と訳すべきである〔張怡孫 (蓀) 2008：860〕。

1981 年に北京の雍和宮(寺)に出家した嘉木揚凱朝によると、チベット仏教におけるチャムの正式名称は、「密呪統部大海之舞踊 (gSang chen rgyub sde rgya mtshor bstan pahi hcham)」であり、年中行事として重要な法要の一つであるという。また、チャムに関しては、『時輪空行海 (Dus hkhör mkhah hgro rgya mtsho)』『金剛帳 (rDo rje gur)』『瑜伽統 (Yo gahi rgyud)』という文献にも記載されているという〔嘉木揚凱朝 2009：63〕。チャムは、チベット仏教の密教に特徴的な息災・調伏の儀式的呪法で、諸悪魔を調伏する法要である。チャムを踊る時にラマ僧は本尊を観想する中で護法神がラマ僧の肉身と同化する舞踊である。

チベットや内モンゴルで流布しているチャムの起源に関わる伝承では、8 世紀、チベットの吐蕃王朝時代のティソン・デツェン (ཐིས་བུ་ཤེན་པོ།、742～797) 王の時代、750 年にインドからチベットに招聘

チベット仏教寺院におけるチャムの起源としては、古代、チベット国王が兄弟のラン・ダルマ（ལྷ་དང་པལ། 809～842年）に殺されて王位を奪取され、チベットの滅仏時代になったことに由来する。その滅仏の要因は寺院における物語として伝えられている。ラン・ダルマの前世は牛であり、その牛は寺院の建築の際に、建築の材料を運搬するために生まれ変わった。そして、寺院の建築の為に、背の皮が破裂して流血しても、黙々と建築用の石・水・木などの運搬に従事した。しかし、寺院の落慶式に際し、施主や職人、あるいは世話役などに対する表彰は厚く行われたにもかかわらず、最も頑張ったその牛に対する表彰はまったくなかった。その上、背の皮が破裂し流血している牛に対しては、落慶式の時に何等の沙汰もなく、顧みられることもなかった。牛は心中非常に不愉快であり、3日後ついに死亡した。その霊魂は生まれ変わってチベットの王ラン・ダルマ（チベット語で牛皇帝を意味する）となったという〔橋本 1942：269-270、印南 1940：107-115〕。ラン・ダルマ王は即位した後、チベットにある寺院を破壊し、経典を焼却し、ラマ僧を殺害、放逐したので、9世紀のチベット滅仏時代が出現した〔李 1989：28〕。このあり様を見たチベット仏教のニンマ（ལྷ་ཁྱེད་པལ།）派のラマ僧ハロンバルジェ・ドルジェ（ལྷ་ཁྱེད་པལ་ལྷ་ཁྱེད་པལ།）という僧は、正月の遊興の時に、彼が仮面の舞踊者に扮し、黒色の馬に跨がり、蔵刀を隠してポタラ宮の門前に来て馬から下り、その宮殿の前で踊りを踊って見せた。踊りが非常に巧みなのでラン・ダルマ王の前に召され謁を賜ったおりに、突然躍り出て隠し蔵刀で王を刺し殺した。ポタラ宮の中は大混乱になりこの暗殺者を捕らえようとしたが、彼はそこを脱出し、先に乗り放しておいた馬に乗って遁走し付近の川に飛び込んだ。煤煙で馬や自分の顔を黒く塗り、黒い帽子を被り、黒表白裏の長い蔵服（チベット族の服）を着ていたので、川を渡る時に煤煙は洗われ、白い馬に別人が乗っているかの如く見せて追っ手をくらまして逃れ去ったという〔橋本 1942、印南 1940、嘉木揚凱朝 2009〕。

「今日藏土能在佛教中表現功德者、舍汝莫屬、朗達瑪（ラン・ダルマ）王破壞佛法、汝當誅殺此危險王、我今助汝、汝不可畏懼」〔嘉木揚凱朝 2009：83、周恒晶 1992：1-10〕。

そのラン・ダルマ王の死後の霊魂は、転生して水霊となったという。水霊は寺院の近くの山の上に住み、山下にある寺院に向かって濁流を注ぎ込んだ。その濁流の勢いは寺院を倒壊させるほどの勢いだった。恐怖に駆られたラマ僧たちは寺院に集まり対応策を話し合ったところ、一人のラマ僧が、「これつまりラン・ダルマ王の霊魂の然らしめるところであろう」と言った。ラマ僧たちもそれを信じて、鬼の仮面・護法神の仮面、あるいは獣の仮面などを被って、往時、ハロンバルジェ・ドルジェがラン・ダルマ王を殺した様式にのっとって舞踊をなし、その霊魂を粉碎したので、ようやく水災を免れることができたという〔橋本 1942：269-270〕。このような理由で、毎年このチャムという舞踊の行事は続けられている。当初はラン・ダルマ王の霊魂による水災を免れる目的であったが、その後は単に水災のみならず、雹災、火災、飢饉などをも免れるために、或いは人の身体より「四百四病」を吹き出させ、他人に伝染させて歩くと信じられている悪魔（怪獣の一種）を降伏させる為にもこのチャムという舞踊が行われるようになった。この行事について印南高一は、「其の功積を賞して喇嘛では彼を宗門の救済者と認め、これを聖霊に加へた。以後喇嘛教は倍旧の繁栄を見たのである。この踊りでは、暴君ラン・ダルマを牛魂の悪鬼の化身としてゐる。そして此等の踊りは毎年正月と6月14、15の2日間、盛大に舉行される」という内容を記述している〔印南 1940：107-115〕。現在、チベット仏教寺院で供養されている牛形（写真1）と牛の面（写真2）は上述の物語を象徴するものであるといわれている。



写真1 大召寺における牛形の供物



写真2 大召寺における牛頭の面（焰魔王面）

3 チャムに関する法会の内容

(1) 仮面の供養について

チャム（舞踊）はチベット仏教の年中行事においては特殊な舞踊である。大召寺におけるチャムの際には、その「チャム」と呼ばれる踊りをする前に必ずチョエジャル（焰魔王面 写真3）とゴーボ（鹿神面 写真4）という仮面を、密教の儀軌經典で加護を受けるために、経堂の真中の法座前の供台に置く。そのため大召寺においてチャムを行う前には、まず、大雄宝殿及び各殿堂を掃除し清潔にする必要がある。そして、殿堂内に新しい果物、六供（六供を象徴した水、水、花、香、灯、水、塔という物）、生花などを供える（写真3）。その後、15日（旧暦の正月と6月）の朝には、普段の大雄宝殿内に置かれている紙パルプと木で作った牛形（写真1）、象形（写真5）、麒麟形（写真6）を全

て外に移動させる。



写真3 焰魔王面と供養物



写真4 鹿神面と専用服



写真5 象形



写真6 麒麟形



写真7 パリンを送る

これらの供養物は、当日の朝8時ごろ、象形のものは大雄宝殿の前庭の真中の場所に置かれ、牛形のは大雄宝殿の西側の場所に置かれ、麒麟形のは大雄宝殿の東側に置かれる。又、菩提過殿前の旗竿上に釈迦牟尼仏像の大型タンカー（写真8）を掛けることもある。そのタンカー（仏画）の前には長い供物台を置き、この仏前の供物台の上に、七宝⁽⁶⁾、六供、花、ジョラー（バター灯）などを供える。また、その供物台の前に中国の伝統的な木製馬車が置かれ、この車内に弥勒仏が安置される（写真9）。



写真8 釈迦牟尼仏像の大型タンカー



写真9 車内に弥勒仏を安置してある

(2) 法会の内容

大召寺では、毎年旧暦の正月8日から15日までと旧暦6月8日から6月15日までの8日間にかけて、「モンラムチェンポ」と呼ばれる法会を行い、8日間のうち、8日から13日までの6日間は読経だけを行い、14日には読経しながら「バリン」(鬼を象徴する 写真7)を寺院の外に送るため、「チョエジャル」(焰魔王 写真3)と「ゴーボ」(鹿神 写真4)という踊りを行う。翌15日には踊りが中心に行われる。

①正月のチャム

正月の祈願大法会においては、主に密教の儀軌經典とツォンカパ大師による顕教の儀軌經典の読経が行われるが、6月の祈願大法会の時期になると、主にチベット仏教のカンジュール⁽⁷⁾經典と密教の儀軌經典の読経が行われている。特に、6月8日からは、ラマ僧が1年間に学習した儀軌經典の試験の制度が定められている。

本論では、正月と6月を分けて記述する。まず、旧暦正月8日から正月15日までの祈願大法会の内容を表6にまとめる。

表6 旧暦正月8日～正月15日までのチャムの法会の内容

正月7日：午後(15:00)から読経のために席や供養物を準備する。
正月8日：午前(5:00～12:00)と午後(14:30～17:00)に読経をする。午前中は「帰依経」「三聚経」「懺悔経」「三世経」「喝茶経」「チョエジャル(焰魔王)」「ジックジットオン(曼荼羅)」の順に読経し、14:30にラマ僧を集めるために銅鑼を叩き、15:00から「帰依経」「三聚経」「懺悔経」「三世経」「ラモンチャバ(祈願経)」の読経を行う。
正月9日：午前(5:00～12:00)と午後(14:30～17:00)に読経をする。午前中は「帰依経」「三聚経」「懺悔経」「三世経」「喝茶経」「チョエジャル(焰魔王)」の順に読経し、14:30にラマ僧を集めるために銅鑼を叩き、15:00から「帰依経」「三聚経」「懺悔経」「三世経」「ラモンチャバ(祈願経)」の読経を行う。
正月10日：午前中(5:00～12:00)だけ読経をする。經典は、「帰依経」「三聚経」「懺悔経」「三世経」「喝茶経」「ラモンチャバ(祈願経)」である。午後(15:00～18:00)ラマ僧たちはチャム儀礼の練習をする。
正月11日：(10日と同じ)
正月12日：(10日と同じ)
正月13日：午前中(5:00～12:00)だけ読経をする。經典は、「帰依経」「三聚経」「懺悔経」「三世経」「喝茶経」「ラモンチャバ(祈願経)」である。9:00～18:00まで、2人のラマ僧がバリンを作る。午後(15:00～17:00)には大経堂の席や供養物等を準備する。夜(19:00)から大型バリンを大雄宝殿に安置する。
正月14日：午前(5:00～12:00)と午後(14:30～18:00)に読経をする。午前中は「帰依経」「三聚経」「懺悔経」「三世経」「喝茶経」「チョエジャル」「ハム」「ゴンボー」「ナムスレ」等の読経をする。14:30から銅鑼を叩く。15:00から「密承統部金剛呪経」、バリンを送るための經典を読経する。
正月14日の具体的な時間表(午前)
午前中(5:00～12:00)読経をする。
正月14日の具体的な時間表(午後)
(14:30～15:00)ラマ僧を集めるために銅鑼を叩く。
(15:00～15:20)「密承統部金剛呪経」バリンを送るための經典を読経する。
(15:20～15:30)ラマ僧全員はバリンを送るために菩提過殿の前庭に移動する。
(15:30～15:50)チャムを行う。チョエジャル(焰魔王の面)とゴーボ(鹿神の面)だけを踊る。
(15:50～16:00)再び、ラマ僧全員はバリンを送るために山門の前に移動する。
(16:00～16:10)「密承統部金剛呪経」バリンを送るための經典を読経する。

(16:10~16:20) バリンに関係する呪を誦して投げつける儀礼。
バリンを投げる儀式の際に、2人のラマ僧がバリンを持ち上げ、その次に儀軌の儀式の指導者であるソックチン・ウンサトラマ僧、ラマ僧がならび、チャム儀礼の踊りのメンバーが続いて、寺院のラマ僧たちが二列に並んで山門（図1の3）を出る。寺院の外の玉泉井の前の空地（図1の1のような場所）で指導者の指導で儀軌経典を誦し、ゾインザスック・ダラマ（高僧）がバリンの先端を外に向けて燃えた火の中に投げ込み、各種の悪魔や悪鬼を払う。その後、信者からバリンに奉げられたハターも火の中に投げ入れる。
(16:20~16:30) 寺院に戻る。その山門で読経をする。
(16:30~16:50) 大経堂に戻り、モンラム経典を誦する。
(16:50~18:00) 信者のために「吉祥経」を誦する。
正月15日：午前（7:00~12:30）供養経とチャムを行う。午後は信者のために「吉祥経」を誦する。
正月15日の具体的な時間表（午前）
(7:00~8:00) 大型釈迦仏タンカー（写真8）を旗竿に展示する。また他の供養物を準備する。
(8:00~10:00) 「帰依経」「三聚経」「懺悔経」「三世経」「喝茶経」「ラモンチャバ（祈願経）」等読経。
(10:00~11:00) ラマ僧達は、「マンラァー」と呼ばれる供養経を誦するため、車内に安置された弥勒仏を連れて寺院を巡礼する。
(11:00~12:30) チャムを行う。（本文に詳しく記述）
正月15日の具体的な時間表（午後）
(15:00~17:00) 信者のために「吉祥経」を誦する。
終了

② 6月のチャム

一般に、この祈願大法会は、内モンゴルにおける各寺院で、1年の間に2回行われる。大召寺では、毎年の旧暦正月と6月の期間に行われているが、法会における読経の内容が異なる。『名双黄寺—清代达頼和班禅在京駐錫地』によると、チベットの祈願大法会は、ダライ・ラマ5世「ロサン・ギャツォ」（1617年～1682年）の時代に、旧暦の正月3日から24日まで行われるようになった。当時、法会は各地域の寺院に広がり、内容も豊富になっていった。そして、この祈願大法会の際に対論の形式で、「ゲシュ⁽⁸⁾」（格西）という学位を選抜する制度が定められたと記述されている〔丹廻冉納班杂ら1997:204-205〕。

一方、大召寺における祈願大法会では、昔から旧暦6月の儀軌経典を暗誦することによって、優秀なラマ僧を選抜するという制度が定められていた。旧暦6月8日～6月15日までの「モンラムチェンポ」と呼ばれる祈願大法会は、次の表7のような内容である。

表7 旧暦6月8日～6月15日までのチャムの法会の内容

6月7日：午後（15:00）から読経のための席や供養物、及びカンジュル経典等を準備する。
6月8日：午前（8:00~12:00）と午後（3:30~4:30）に読経をする。午前中は「帰依経」「三聚経」「懺悔経」「三世経」「喝茶経」「カンジュル（大蔵経）」の順に読経し、午後2:30にラマ僧を集める為に銅鑼を叩き、午後3:00から「帰依経」「三聚経」「懺悔経」「三世経」「カンジュル（大蔵経）」の読経を行う。同時に儀軌経典の試験を行う。
6月9日：（8日と同じ）
6月10日：（8日と同じ）
6月11日：（8日と同じ）
6月12日：（8日と同じ）

6月13日：午前（8：00～12：00）と午後（15：30～16：30）に読経をする。午前中は「帰依経」「三聚経」「懺悔経」「三世経」「喝茶経」「カンジュル経（大蔵経）」の読経であり、14：30にラマ僧を集めるために銅鑼を叩き、15：00から「帰依経」「三聚経」「懺悔経」「三世経」「カンジュル（大蔵経）」の読経を行う。同時に儀軌經典の試験を行う。13日は儀軌經典の試験の最後の日である。朝からバリンを作り、19：00からバリンを大雄宝殿に安置する。
6月14日：午前（5：00～12：00）と午後（14：30～17：00）に読経をする。午前中は「帰依経」「三聚経」「懺悔経」「三世経」「喝茶経」「チョエジャル（焰魔王）」「ジックジットオン」「ハム」「ゴンボー」「ナムスレ」等の読経をする。14：30にラマ僧を集めるために銅鑼を叩き、14：30からバリンを送るために「帰依経」「密承統部金剛呪経（バリンの儀軌）」の読経を行う。
6月14日の具体的な時間表（午前）
午前中（5：00～12：00）読経をする。
6月14日の具体的な時間表（午後）
（14：30～15：00）ラマ僧を集めるために銅鑼を叩く。
（15：00～15：20）「密承統部金剛呪経」バリンを送るための經典を読経する。
（15：20～15：30）ラマ僧全員はバリンを送るために菩提過殿の前庭に移動する。
（15：30～15：40）チャムを行う。チョエジャル（焰魔王の面）とゴーボ（鹿神の面）だけを踊る。
（15：40～15：50）「密承統部金剛呪経」バリンを送るための經典を読経する。
（15：50～16：00）再び、ラマ僧全員はバリンを送るために山門の前に移動する。
（16：00～16：10）「密承統部金剛呪経」バリンを送るための經典を読経する。
（16：10～16：20）バリンに関係する呪を誦して投げつける儀礼。この儀式の内容は正月と同じである。
（16：20～16：30）寺院に戻る。その山門で読経をする。
（16：30～16：50）大経堂に戻る。
（16：50～18：00）信者のためにモンラムという供養経を誦する。
6月15日
6月15日の具体的な時間表（午前）
（7：00～8：00）チャムのため、大型釈迦仏タンカーを旗竿に吊し上げる。また、供養物とチャムで使用するものをその場所に配置する。
（8：00～10：00）「帰依経」「三聚経」「懺悔経」「三世経」「喝茶経」「ラモンチャバ（祈願経）」等を誦する。
（10：00～11：30）ラマ僧達は、「マンラァ経」と呼ばれる供養経を誦するため、車内に安置された弥勒仏を連れて寺院を巡礼する。
（11：30～13：00）チャムを行う。
6月15日の具体的な時間表（午後）
（15：00～17：00）この時間に信者の為にモンラムという供養経を誦する。
（17：00～20：30）「松樹灯」と呼ばれるものを供養する。（松樹灯：松の木の形のような供え台の上に、「ジュラ」と呼ばれる仏灯を置く。そのため漢語で「松樹灯」と呼ばれる）
終了

正月と6月の祈願大法会においては、儀軌經典は異なるが、その日程と時間配分は余り変わらないのである。なお、表6と表7は、筆者自身が参加したものと調査したものに基づいて作成したものである。

(3) 踊りの演目について

1980年以前に「迷信」行為として、チャムの宗教性については語ることは禁じられてきた。そして、もともと密教の儀軌經典として秘儀であったため、その全容を留めた記録も余り残っていないのが現状である。そうしたことから、大召寺における最初のチャムは、大召寺のゾインザスック・ダーラマ僧（寺の住職）やシルグト・ラマ僧（首席の僧）、また、大召寺のその他の年輩のラマ僧、及

び、大召寺に隣接するシレート・ジョー（席力図召寺）の年輩のラマ僧も集まって、昔の踊りの形式を思い出しながら、表8のような大召寺に元々ある演目の種類が復元されたという。

表8 従来からの大召寺のチャム

順番	寺院における名称	日本語訳
1	イック・トダカム	大髑髏面
2	イック・アゼル	大行脚僧
3	バック・トダカム	小髑髏面
4	パッガ・アゼル	小行脚僧
5	チャガ・ウブゲン	老翁
6	チョエジャル	焰魔王
7	ゴンボ	鹿神

しかし、1990年ごろに、地方政府により大召寺の観光化が求められた。それによって、大召寺も観光収入を得られるようになったため、それまで年中行事として行われてきたチャムを含め、昔から一般の人が入れなかった密教における護法神の仏殿も、現在では観光客が見学するようになった。さらに観光化は進められ、1999年には同じ内モンゴルの「オルドス」という地域の「ウシン召」から、より長い歴史を持つといわれる図17のような形態のチャムの仮面と踊りを教えてもらい、それと従来からの大召寺のチャムを合わせて踊るようになった。当初は2つのチャムを合わせたために長時間の演技となったが、それは観光には向かないと判断されたため演技が短縮されている。

この2つのチャムを合わせたものが表9であり、つまり、現在の大召寺で行うチャムである。このチャムを踊る順序は演目によって決められていて、表9の順序に従って現在のチャムの演目は行われる。

表9 チャムの演目の順番と内容

順番	寺院における名称	日本語訳
1	ボ・モ	男舞と女舞
2	イック・トダカム	大髑髏面
3	トダカム	髑髏面
4	イック・アゼル	大行脚僧
5	トゥルダクシ	屍陀林主
6	バック・トダカム	小髑髏面
7	アゼルニ	行脚僧
8	パッガ・アゼル	小行脚僧
9	アゼルシ	行脚僧・信者
10	ガルダ	大鵬金翼鳥
11	チャガ・ウブゲン	老翁
12	チョエジャル	焰魔王
13	ゴンボ	鹿神
14	チェジ・ジャンバ	黒帽法王
15	ホレ・チャム	全体のチャム

(4) 踊りの事例——バック・トダカムの事例から——

祈願大法会における最後の2日間である、旧暦の正月の14日と15日、或は、旧暦の6月14日と15日には、一般に内モンゴルにおける中国人が「跳鬼」、「跳神」と呼ぶ「チャム」が演じられる。大召寺では、チャムを踊る手順は表9のように行われる。

まず、チャムの際にラマ僧達は菩提過殿の中で自分の担当する役に扮装し、扮装の準備が整うと、ラマ僧達は自分の出番までその殿堂の中で待機している。銅鑼が叩かれると、ソックチン・ゲフィーラマ僧（写真18）は長い香を手にして扮装したラマ僧達を迎えに行き会場まで導く。

バック・トダカム「髑髏頭」（髑髏面）という踊りは全ての踊りのうち第6番目の演目にあたる。以下は、バック・トダカムの内容の記述である。まず、2人のラマ僧が頭に髑髏面、つまり、仮面の頭の上に赤い線の紋様があり、深紅の大きな口が開いている髑髏面を被って、体に白色の上着と白色の専用のズボン（上着の袖とズボンの膝の部分に色彩がある）を着る。また、3色のスカート（腰に付け、モンゴル式の乗馬靴を履き、色彩がある短い木棒（木棒には5色の布が結んである））を手を持つ。以上がバック・トダカムの扮装である（写真18、19）。

チャムの第6番目に、銅鑼が叩かれると、ソックチン・ゲフィーラマ僧が手に長い香を持って迎えて行く。踊りは2人のラマ僧によって行われる。会場に到着した後、2人のうち1人が会場の西側に立って、1人が会場の東側に立つ（写真18）。その後、楽器を担当する現在のソックチン・ウンサトラマ僧が、「チャー」（鐃鉢）を2回叩く。この時2人の鬼は両手で木の棒をあげ、続いて「チャー」（鐃鉢）、「ハンガル」（太鼓）、「ビレー」（大型喇叭）などの楽器が順次、演奏されるのを合図に登場する。



写真10 ポ



写真11 モ



写真12 イック・トダカム、バック・トダカム、イック・アゼル



写真13 ゲシ、アゼルニ、バグガ・アゼル、アゼルシ、スルジム



写真14 ホレ・チャム、トダカム

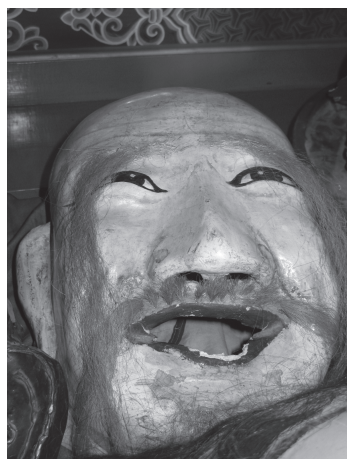


写真15 チャガ・ウブゲン



写真16 ゴンボ



写真17 チョエジャル



写真18 バック・トダカム



写真19 バック・トダカム



写真20 扮装の場



写真21 筆者が参加したチャムの会場

以下の図では、演者1人の踊りに関する詳細な動作と足並みを表示する。図2、図3はバック・トダカムの始まる時である。

次に、その踊りが正式に始まる（図3の①～図4の⑤まで）。この踊りでは、「ジー（1）、ニー（2）、スナム（3）、チャー（4）」というチベット語の数をリズムのように使って踊る。

まず、第1回目の動作では、前へ右の足をあげて、右の手で木の棒の下部を、左の手で木の棒から伸びる5色の布の端を持ち、頭上にかざす。右の足を前にあげ、左の足だけで3回跳び、時計回りに1回転する。そのあいだは両手で左右に木の棒を振る。（図3、図4）。

第2回目の動作では、前へ左の足をあげて、左の手で木の棒の下部を、右の手で木の棒から伸びる

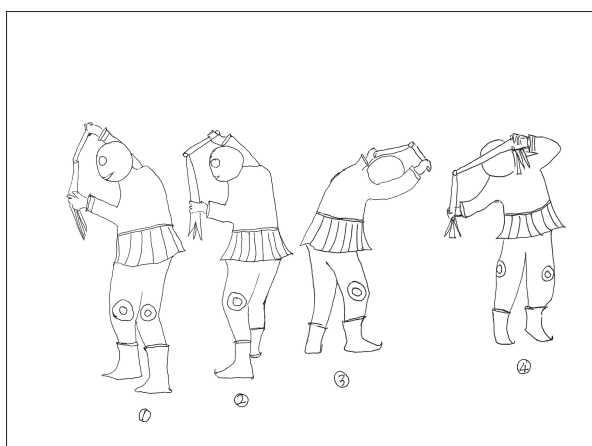


図 2

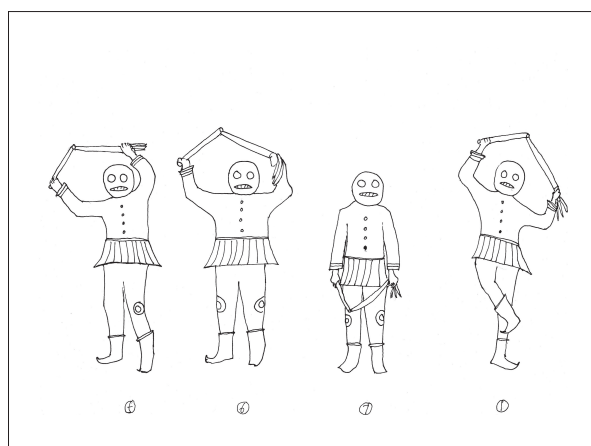


図 3

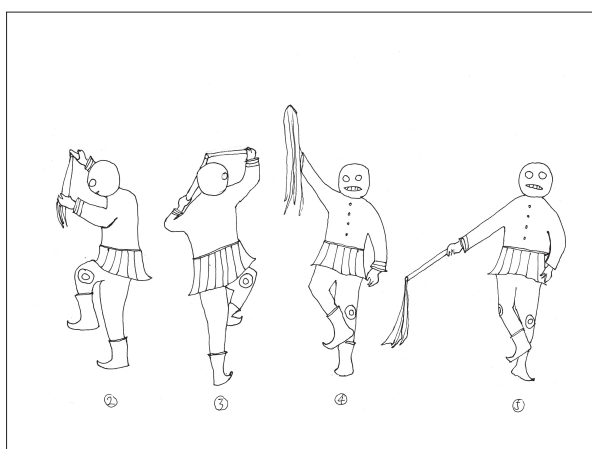


図 4

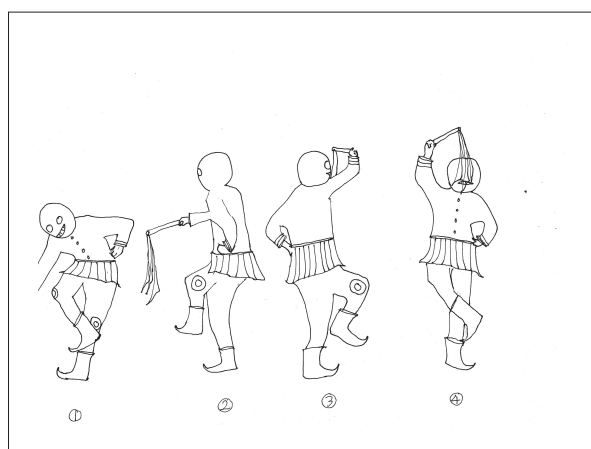


図 5

5色の布の端を持ち、頭上にかざす。左の足を前にあげ、右の足だけで3回跳び、反時計回りに1回転する。そのあいだは両手で左右に木の棒を振る（図4）。

第3回目の動作では、前へ右の足をあげて、左の手は腰にあて、右の手は木の棒の下部を持ち、右の足を前にあげ、左の足だけで3回跳び、時計回りに1回転する。そのあいだは木の棒から伸びる5色の布の端を地面に向けて少し打つ（図5）。

第4回目の動作では、前へ左の足をあげて、右の手は腰にあて、左の手は木の棒の下部を持ち、左の足を前にあげ、右の足だけで3回跳び、反時計回りに1回転する。そのあいだは木の棒から伸びる5色の布の端を地面に向けて少し打つ（図6）。

第5回目の動作では、前へ右の足をあげて、左の手は腰にあて、右の手は木の棒の下部を持ち、その木の棒を頭上にかざす。右の足を前にあげ、左の足だけで前の方向へ3回跳び、そのあいだは木の棒から伸びる5色の布の端を頭上に振る（図7）。

第6回目の動作では、前へ左の足をあげて、右の手は腰にあて、左の手は木の棒の下部を持ち、その木の棒を頭上にかざす。左の足を前にあげ、右の足だけで前の方向へ3回跳び、そのあいだは木の棒から伸びる5色の布の端を頭上に振る（図8）。

第7回目の動作では、前へ右の足をあげ、そのあげた足の太ももに両手を添え、そのままの体勢で前方へ3回跳ぶ（第8回目の動作の図9を参考）。

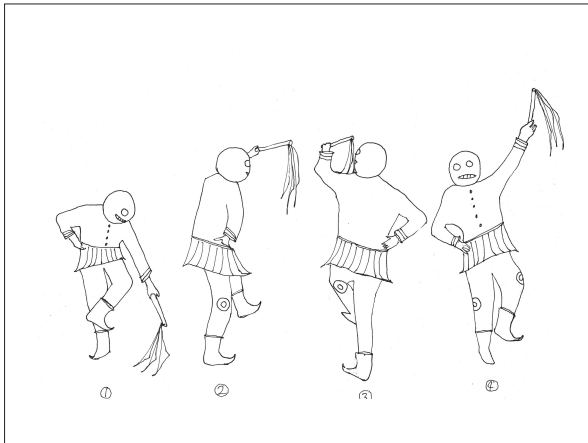


図 6

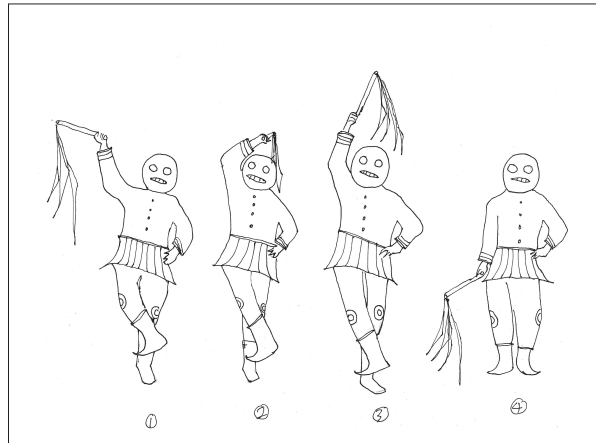


図 7

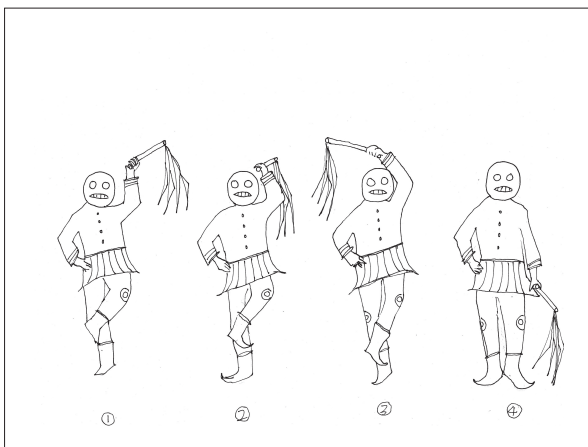


図 8

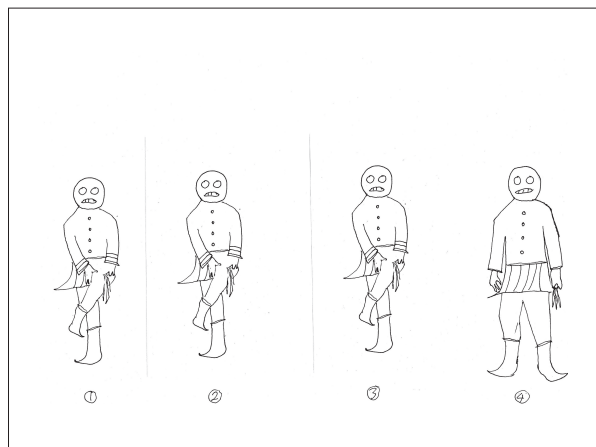


図 9

第 8 回目の動作では、前へ左の足をあげ、そのあげた足の太ももに両手を添え、そのままの体勢で前方へ 3 回跳ぶ（図 9）。

第 9 回目の動作では、木の棒を地面に置き、両手を腰に添え、若干腰を落とした体勢から上体だけを背後にひねり、体を 3 回上下させる。今度は反対側に状態をひねり、同じく体を 3 回上下させる（図 10 の①～②）。

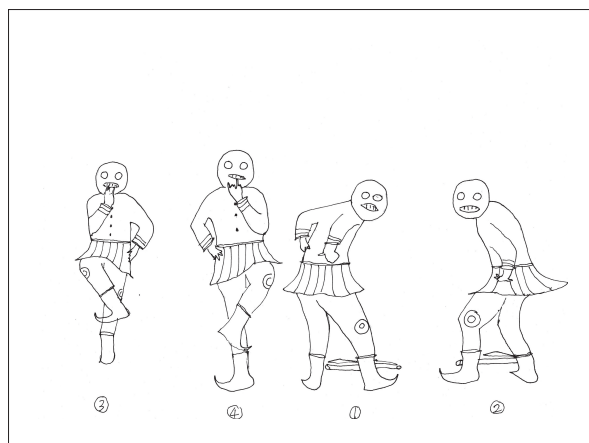


図 10

第10回目の動作では、前へ右の足をあげ、両方の手で手印を結ぶ（中指、薬指、親指を閉じ、人指し指と小指を立てる）。その両手をそれぞれあげ、右の足を前にあげ、左の足だけで3回跳び、時計回りに1回転する。そのあいだは両手を左右に振る（図11）。

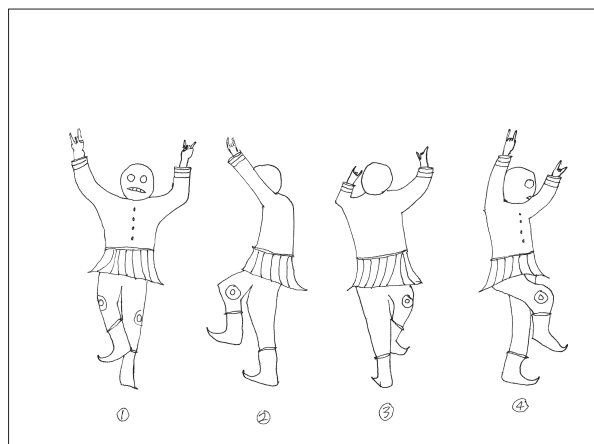


図 11

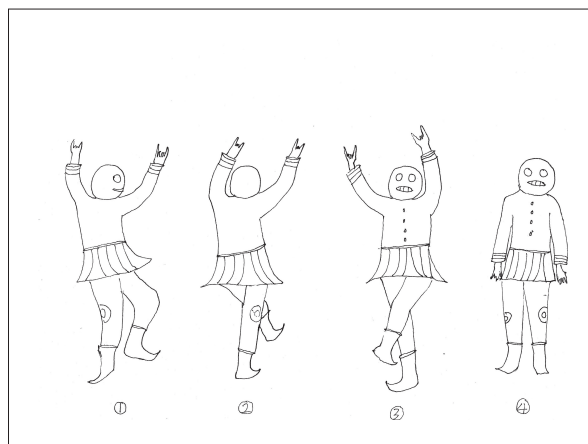


図 12

第11回目の動作では、前へ左の足をあげ、両方の手で手印を結ぶ（第10回動作と同様の手印）。その両手をそれぞれあげ、左の足を前にあげ、右の足だけで3回跳び、反時計回りに1回転する。そのあいだは両手を左右に振る（図12）。

第12回目の動作では、前へ右の足をあげ、左の手を腰にあて、右の手は手印を結び（第10回動作と同様の手印）、それを地面に向ける。そのままの体勢で、左の足を使い3回跳び、時計回りに1回転する。その際、印を結んだ手を跳ぶ動作に合わせて、上下に振る（図13）。

第13回目の動作では、前へ左の足をあげ、右の手を腰にあて、左の手は手印を結び（第10回動作と同様の手印）、それを地面に向ける。そのままの体勢で、左の足を使い3回跳び、反時計回りに1回転する。その際、印を結んだ手を跳ぶ動作に合わせて、上下に振る（図14）。

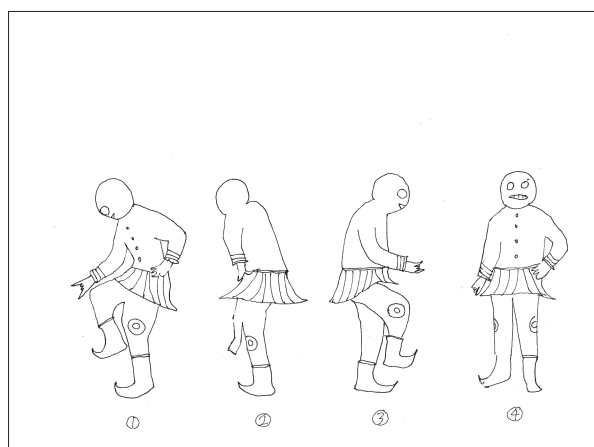


図 13

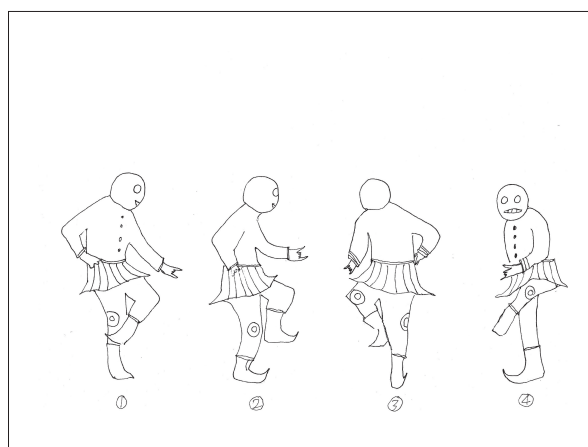


図 14

第14回目の動作では、前へ右の足をあげ、左の手を腰にあて、右の手は手印を結び（第10回動作と同様の手印）、それを腰の前にかざす。その体勢で、右の足を使い3回跳び、時計回りに1回転する（図13）。

第15回目の動作では、前へ左の足をあげ、右の手を腰にあて、左の手は手印を結び（第10回動作と同様の手印）、それを腰の前にかざす。その体勢で、左の足を使い3回跳び、時計回りに1回転する（図14）。

（5） トダカムの事例から見た役割

チャムはチベット仏教の密教の1つの儀式であり、そのため、密教の神秘的な特徴を持っている。この特徴としては簡単なチャムの儀式を通じていろいろな事を表現する役割がある。しかし、チャムのすべての踊りを取り上げることは非常に難しいので、トダカムという髑髏の踊りの事例を記述する。このトダカムの事例からチャムが象徴する意味や役割などを解明したいと思う。

内モンゴルのチベット仏教寺院では、一般的には旧暦の正月と6月の祈願大法会の最後の2日間にチャムが行われる。中国の新年については中村喬の『続中国の年中行事』によると、正月末日に百鬼を追う風習があり、この鬼を送り祓う観念が存在する〔中村1990：250〕。そのため、チャムにおいて、正月の14日に鬼を送り祓う表現をすることは中国の風習の影響を受けたと考える。つまり、チャムは鬼を送り祓い、旧年の邪気を送り祓い、新年の吉祥を招く役割を持っている。

中国における鬼の意味について、廣田律子の『鬼の来た道——中国の仮面と祭り』によると、「見えない鬼は、見えない故に恐れられ、人に病気や種々な不幸をもたらす悪鬼とされ、追讎の行事では逐われる対象となる」〔廣田1997：36〕という内容が記述されている。そのため、チベット仏教寺院である大召寺では、正月14日にチャムの中で「バリン（張り子とハダカムギで作った三角形の形）」（写真7）という鬼を象徴した髑髏の形をしたものが、燃えた火の中に投げ込まれる。さらに、チョエジャル（焰魔王）は、人に病気や種々な不幸をもたらす鬼を追いやるために、激しい踊りをしながら、鬼をとどめないように「バリン（ハダカムギで作った小さな人形の形）」という鬼を象徴した人形の形をした供物を砕く。このように各種の悪魔や悪鬼などを祓うという象徴がチャムの中には表れている。

チャムの中には「トダカム」と呼ばれる髑髏面が表れる。このトダカム（髑髏面）は一般的には鬼を指している。そのためにチャムは「跳鬼」と呼ばれている。実際に、チベット仏教における密教のトダカム（髑髏）の形態としては仏画や壁画に描かれた（図15、16）髑髏形の面がよく表れ、チベット仏教の教理によると「死の神」と称せられている。つまり、密教の特殊な深層の意味をもたらす髑髏面とされる。

死の神はチベット仏教の教理によると、山の領域の葬場の神である。死の神の象徴する意味は簡単に言えば、1つの人生の終わりが次の生まれ変わりの前触れになるという変化を表すものである。そのためラマ僧達は誰も死を迎える恐怖や脅威をも直視し、受け入れなければならない。そして、自己や事物の「終わり」が「始まり」と同じく幻影にすぎないことを悟る。そのため、チベットの修行者は、葬場に棲みつき、そこで瞑想をする〔ローソン1992：69〕。

チャムの中のトダカム（髑髏面）が表す役割として、単に、生命が1回限りの終末を表した恐ろし



図 15 死の神



図 16 死の神

(出典)『聖なるチベット——秘境の宗教文化』[1992：69]を引用した。

い姿にとどまるものではなく、衆生は何度も死と再生を繰り返し、何度でも生まれ変わる。そのため、死とは変容と霊的なプロセスを司る力強く普遍的な存在であり、これに恐怖を感じるのは愚者や気の弱い者だけなのである。死後、最後まで髑髏の形を残すのが人骨である [ローソン 1994：35]。そのため、チベット仏教はチャムを通じて民衆に宗教の死生観の観念を表現する役割を持っている。

4 現代における伝統文化の消失と現代への適応

(1) 大召寺におけるチャムの変化

大召寺のチャムは、1984 年ごろに、地方政府により大召寺の観光化が求められた。それによって、1999 年には同じ内モンゴルの「オルドス」という地域の「ウシン・ジョー（烏审（審）召）」から、より長い歴史を持っているだろうといわれる図 17 のような形態のチャムという儀式的仮面と踊りを教えてもらい、それと従来からの大召寺のチャムを合わせて踊るようになった。

当初、元々あるチャムとその他地域のチャムの 2 つを合わせたために長時間の演技となったが、その後、それは観光には向かないと判断されたために演技が短縮された。表 8 の演目は 1988 年に伝統的なチャムを復元したものであり、これらは大召寺の固有的なチャムであると考えられる。さらに 1999 年になると、オルドスという地域のウシン・ジョー（烏审（審）召）からチャムが伝来したが、観光のために短縮され、表 10 のような演目になった。表 9 は上述の 2 つのチャムの演目が合成され、現在に至るまで大召寺の演目となっているものである。このように、近年の寺院の観光化により、大召寺のチャムの形態にも影響が見られ、従来から変化してきている。

表 10 現在大召寺であるウシン・ジョー（烏审（審）召）から得られたチャムの幕

幕の順番	寺院における名称	日本語訳
1	ボ・モ	男舞と女舞
2	トダカム	髑髏面
3	トウルダクシ	屍陀林主
4	アゼルシ	行脚僧

5	アゼルシニ	行脚僧二
6	ガルダ	大鵬金翼鳥
7	チェジ・ジャンバ	黒帽法王
8	ホレ・チャム	全体のチャム

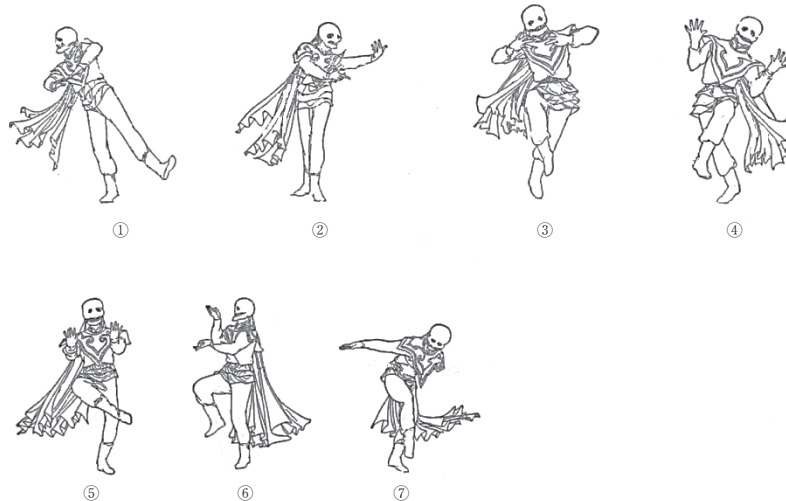


図17 ウシン・ジョー（烏审（審）召）のトダカムの形態
（出典）『中国民族民間舞蹈集成』[喬ら 1992：189]を基に作成した。

大召寺において復興されたチャムには、筆者が1993～2004年まで参加していた。2000年の踊り演目の種類は表8であるが、ウシン・ジョー（烏审（審）召）からラマ僧を招聘してチャムを教えてもらった。つまり、それは大召寺の復興したチャムとウシン・ジョー（烏审（審）召）の復興したチャムが合併された現在の大召寺の伝統文化と言われているものである。

例えば、現在の大召寺のバック・トダカムという髑髏面の踊りは、1994年に、兄弟子であるソクチン・ゲフィーラマ僧から、筆者に伝授された。それは、筆者が1994年から2004年まで、この「バック・トダカム」という踊りを担当することになった。この大召寺において復興されたチャムの踊り形態的变化の説明として、図17のようにウシン・ジョー（烏审（審）召）の「トダカム」という踊りの事例を参照されたい。

上述したように内モンゴルにおけるチベット仏教寺院のトダカムの意味として、大召寺の「バック・トダカム」とウシン・ジョー（烏审（審）召）の「トダカム」という語義は同様な意味を持つことを考える。さらに、その他寺院のラマ僧から聞いたところによると、トダカムは「人身難得、生死無常、解立輪廻」ということを象徴するチャムである。

（2） 伝統文化の消失と現代への適応

大召寺のチャムは1966年以降の文化大革命によって一度中断された。しかし、1980年代以降、再びチャムは復元された。その際、当時のラマ僧たちは7演目の復元には成功した（表8）。だが、彼らの記憶に残された仮面の種類から、かつての大召寺には20個近くの演目が存在していたことを彼らは自覚していた。それが、その後の大召寺における現在まで続くチャムの復興に影響を与えた。それは端的に言えば大召寺の「伝統」的な形式に近づけるための動きである。

復元からしばらくたった1990年代、中国の急速な経済的発展環境の中において、内モンゴル地方政府の要求もあって大召寺の観光事業が進められた。そして、寺院で行われてきた法会も観光化の要素とされていった。その中で、ラマ僧以外には開放されてこなかったマニ法会が、一般客や観光客向けに開放されるという動きがあった。また、祈願大法会においてチャムもその舞踊が広く一般客や観光客向けに開放された。このような観光化によって金銭的收入を獲得し、それに合わせてラマ僧たちの生活水準も向上した。だが、同時にラマ僧の宗教的な思想や生活様式を消失させていった面もある。

そのような動きの中で、チャムの演目にさらに、より歴史的に古い価値を有するとされる内モンゴルにおけるオールドス地域のウシン・ジョー（烏审（審）召）のチャムの演目を加える動きがおこった。これは、演目数の増加や歴史的価値のある演目であるために観光化にさらに好影響をもたらすと考えられた。そして、演目的に重複するものが短縮されたり、廃止されるなどして、現在の大召寺のチャムで行われる演目の形となっていった。

このような動きは一見すると観光化に適応し、金銭收入の獲得を第一義としたチャムの復興のようにも見える。それも大召寺における現代への適応の一側面であることは確かである。だが、大召寺には「伝統」的には、かつて20演目近くの演目があったにも関わらず、当初復元できた演目数は7演目であった。外部から新たな演目を導入することは、このかつての「伝統」的な大召寺のチャムの形式に近づけることでもあった。そのために、ラマ僧たちは外部から導入した演目のうち重複する演目を短縮したり廃止したりしている。そして、何よりこのチャム自体を維持するためには、演目を演じるためにラマ僧たちは大召寺の「伝統」的な徒弟的教育システムのなかで技術を習得する必要がある。そのために大召寺の「伝統」的な教育システムやチャムの形式が残されたのである。

これらのことから、現代において大召寺は、地方政府などの要請や観光化による金銭收入により従来のある方から変化を遂げたといえる。そしてその変化に適応できないでいる現状があるといえる。だが、重要なのは、そのような現代の状況の中で、ラマ僧たちが維持し、復元しようとする「伝統」的な要素が主体的に選択されているということである。本論に則していえば、チャムの形態やそれを支える徒弟的教育システムなどが、大召寺ラマ僧たちによって主体的に選択された要素であるといえる。

現代の観光化と金銭收入を第一義とするような動きの中で、ある要素を主体的に選択し残したということは、言い換えればそれは大召寺とラマ僧たちが現代に適応しようとする姿であるといえる。そのため、この両面が大召寺のラマ僧たちの現代への適応の姿であるといえることができる。

ここで、筆者の調査した現在社会における伝統的なチャムという非物質文化の消失と現代への適応を分析してみたい。まず伝統的なチャムという非物質文化の消失に関しては、以下の2つの要因が考えられる。

- ①主に、1966年～1976年までの10年間の出来事として、思想と文化などの闘争とラマ僧の思想を改造する経済改革の出現などがあった。
- ②1984年から、寺院が観光地化されていったことにより、次第にラマ僧の考え方や生活に影響を与え、出家の目的も変化した。

次に、伝統的なチャムの現代社会における適応には、以下の2つの事項が考えられる。

- ①現在、中国の中央政府はチベット仏教に対して、主に監督や制御などの方法で管理をしている。そ

のため、ラマ僧の他の寺院での勉強や修行は自由には行えなくなっている。より良い伝統的な仏教文化を維持するためには、僧侶が自由に他の寺院で学習できる制度が必要である。

②「非物質文化遺産」という面からも、伝統的なチャムとして、舞踊の芸術的側面より舞踊のもつ深層的な意味を重視し保護することが望ましい。

まとめとして

木村氏の研究からは、インドのラダック地方のチベット仏教寺院におけるチャムの現状が多少わかる。内モンゴルの大召寺においても同様に1980年代以降チャムの復興が行われている。1980年代には地方政府の要望により寺院は観光地となり、チャムも観光化が進められたが、当初、ラマ僧たちはそのことを意識してはいなかった。それが、観光化によって収入を得る中で次第に観光化への意識が高まり、外部から新たなチャムを取り入れるという行動まで行っている。このように同じチャムの復興と観光化という現象についても、インドのラダック地方のタクトク寺と大召寺とでは違いがある。大召寺の特色としては、地方政府の介入とその後のラマ僧の観光化への意識の高まり、その結果としての新たなチャムの導入にその特色があるといえる。もちろん、現在の内モンゴルにおけるすべての寺院が大召寺と同じ状況であることが考えられる。ゆえに、現在、地方政府によって新たに多くの寺院が復興されている。

また、現在寺院における60歳以上のラマ僧は、文化大革命の期間に思想改造を受けたため、一時俗人になって一般的な企業に就職するなどしている。そのため、仏教の勉強、自らの修行、そして社会の人々のための説法と精神的な指導は、伝統的な方法と異なることになった。

例えば、チベット仏教の修法では伝統的なマニ法会のような法会時期には、ラマ僧以外の人はその読経する殿堂の中に入ることができなかった。しかし、ラマ僧の思想改造によって、復元した神秘的なマニ法会は観光客に対しても解放されるようになった。そのため、読経をしている殿堂の中へも外部の人が入ることができるようになった。この状況は大召寺だけにとどまらず、内モンゴルすべての地域で見られる。

これからの内モンゴルのチベット仏教のラマ僧たちは、現代社会における経済を優先させる方向に歩んでいくのか。それとも、仏教的な価値観を重視した伝統を守り続けて行くことに主眼を置きながら、観光化の方針を立てるのか。これは簡単に結論を出すことは難しい。

このまとめにおいては寺院の観光化という表面的な現象に注目した分析を試みた。だが、本論のために調査した現在の大召寺のチャムについての詳細な資料を活かしきれていない。観光化のために新たに導入されたチャムの要素が何であったのか、そして、従来から大召寺で行われてきて、現在も残されたチャムの要素は何かという分析を通して、チャムの現代社会への適応についてはさらに深く分析したいと考えている。

本論は内モンゴルのフフホト市における大召寺のチャムを取り上げて、そのチャムの社会に対する役割を論じた。しかし、チベットにおけるチャムも十分に把握し、調査し続けて行きたい。

今後は本論で記述したような現状を踏まえ、大召寺のラマ僧の組織や勉強について考えていくことも必要である。ラマ僧の役割について見つめ直すことも重要だと思う。チベット仏教の仏学の勉強、

自らの修行、そして社会の人々のための説法と精神的な指導をすること、これらのラマ僧の役割について見つめ直すことが重要である。学び得た仏教の知識と実践した体験の知恵に基づくさまざまな宗教儀式を通じて、人々の指導をすること、これがチャムの役割、換言すれば、ラマ僧の役割であると思う。そうすればチャムのような宗教儀式が社会のために生きるのである。だからこそ、社会の多くの人々の布施が得られるのである。

現在、仏学の勉学や修行に割く時間がラマ僧に比べて圧倒的に少ない在家の人々に対し、ラマ僧は長年培った知識と体験に基づき宗教儀式や説法をしていく、これが理想である。しかし、現実的には、寺院は観光地化し、寺院の宗教儀式にも多くの変化が起こっている。

こうした状況は、内モンゴルのチベット仏教寺院である大召寺だけでなく、内モンゴル或いは中国におけるすべてのチベット仏教寺院の状況と考えられる。チベット仏教におけるチャムの状態に依存するばかりではなく、伝統的なチベット仏教の教育を今後も長く存続させることが課題である。

本稿を終えるにあたり、聞き取り調査にご協力いただきました多くの人々に心より感謝の意を表し、厚く御礼を申し上げます。

注

- (1) 「大召寺」という呼称は漢名で、モンゴル語では「イック・ジョー」と言われている。「イック」は「大」の意識であり、「ジョー」は「召」の音訳で「廟」の意味である。本論に使った寺名は実際には「大召」であるが、わかりやすくするために「大召寺」のように「寺」の字を添えて使用している。
- (2) 法名ザットバ・ザムスゥー（漢名は趙計計 1920年～2003年に円寂）は7歳で大召寺に出家し、1950年頃に一般の仕事に参加した。1980年以後は「向陽映画館」の経理を退職して、寺院に復帰した。
- (3) シルグト・ラマ僧（漢名は張英魁 1924年～1997年に円寂）は7歳で大召寺に出家し、1950年頃に一般の仕事に参加した。1980年以後は「文化庁」の職員を退職して、寺院に復帰した。
- (4) 護法神はチベット仏教寺院における各種山神や地方の神などを指している。
- (5) 仏前に供える六供については『広説佛教語大辞典』によると、「密教において、仏前に供える閼伽・塗香・華鬘・焼香・飲食・灯明の六つをいう。これらは順次に、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六波羅蜜を象徴するとされる」とある。
- (6) 仏前に供える七宝とは『広説佛教語大辞典』によると、「転輪聖王が具えているという七種の宝」である。この七種の宝とは、順に法輪宝・摩尼宝（神珠宝）・妃宝（玉女宝）・大臣宝（主蔵臣）・白象宝・紺馬宝・將軍宝（主兵臣）の七宝を指し、『俱舎論』によると修行の結果得られる七種類の徳性を象徴するとされる」とある。
- (7) カンジュル経典とはチベット仏教における大蔵経であり、カンジュルはチベット語では原論を意味し、テンジュルは解明論を意味する。これらはチベット仏教における最大の二部経典であり、カンジュルは一般的には108函であり、テンジュルは一般的には225函である。
- (8) 「ゲシュ」とは、チベット仏教における仏学院の中の博士を意味する。

参考文献

日本語（五十音順）

- 印南高一 1940年 「喇嘛舞蹈見聞記」 吉岡永美編『蒙古』通巻第97号、善隣協会
『喇嘛教近代史』遠方出版社 pp.101-114
- 木村理子 2007年 『モンゴルの仮面舞儀礼チャム——伝統文化の継承と創造の現場から——』風響社
- 木村理子 2011年 「ブータンのチャムと密教圏のチャムとの比較考察——ブータン王国のゾンのチャムから

- 考えるチャムの「疑似体験」と「聖と俗の境界」——『演劇研究 第34号』早稲田大学坪内博士記念演劇博物館 pp. 17-63
- 中村喬 1990年 『続中国の年中行事』平凡社
- 中村元 2001年 『広説佛教語大辞典』東京書籍
- 長尾雅人 1947年 『蒙古学問寺』全国書房
- 長尾雅人 1947年 『蒙古喇嘛廟記』高桐書院
- 橋本光實 1942年 『蒙古の喇嘛教』佛教公論社
- 廣田律子 1997年 『鬼の来た道——中国の仮面と祭り』玉川大学出版部
- フィリップ・ローソン、森雅秀ら訳 1992年 『聖なるチベット——秘境の宗教文化』平凡社
- 嘉木揚凱朝 2004年 『モンゴル仏教の研究』法蔵館

中国語（アルファベット順）

- 張怡蓀ら 2008年 『藏漢大辞書』民族出版社
- 德勒格 1998年 『内蒙古喇嘛教史』内蒙古人民出版社
- 德勒格、乌云高娃 2004年 『内蒙古喇嘛教近代史』遠方出版社
- 益西多杰（傑） 2001年 『塔尔寺話史』民族出版社。
- 董錫玖 1984年 『中国舞踊史』文化芸術出版社。
- 丹迥冉納班杂ら 1997年 『名双黄寺——清代达賴和班禪在京駐錫地』宗教文化出版社
- 郭淨 1992年 『中国面具文化』上海人民出版社
- 嘎尔瑪澤朗 2008年 『面具文化「我国藏区寺廟神舞及藏戲面具研究」』四川民族出版社。
- 根敦阿斯尔 2011年 「ラマ教寺院の年中行事——内モンゴル「大召寺」のマニ法会を対象——」『比較民俗研究 25号』神奈川大学比較民俗研究会 pp. 152-163
- 喬吉 2008年 『蒙古佛教史』内蒙古人民出版社
- 嘉木揚凱朝 2009年 『中国蒙古族地区佛教文化』民族出版社
- 紀蘭慰 1998年 「藏伝佛教舞踊（日本語訳：チベット仏教舞踊）「羌母（ヤンム）」と「査瑪（チャム）」比較研究」『民族芸術研究 第4期』 pp. 39-42
- 李安宅 1989年 『藏族宗教史之实地研究』中国藏学出版社
- 康玉岩、梁力生、周元 1994年 『中国民族民間舞蹈集成（内蒙古卷）』中国民族民間舞蹈集成編集部編新華書店北京發行所
- 周恒晶 1992年 『米拉查瑪“普寧寺大型佛教舞蹈劇”』河北美術出版社
- སྐུ་པ་བསོད་ནམས་རྒྱལ་མཚན (サキヤ・ソウナンジャルサン) 『ཐུག་པ་བསམ་གཏན་ལཱ་མཚན་པའི་མཛེས་ལྷན་པོ་ (王統世系明鑒)』